

Tennessee Williams と Arthur Miller

との比較

柴田みどり

アメリカの演劇は1920年代から30年代において突如黄金時代をむかえた。Eugene O'Neill (1888~1953) を初めとして、この時期には数多くの秀れた劇作家たちを輩出し、従来のアメリカの演劇の主流であった「良く仕組まれた芝居」に対しても、「真面目な」演劇という新しい伝統を造り上げたのである。第2次大戦後においても、Broadway の主流は「良く仕組まれた」メロドラマと、急激に完成してきたいわゆる“musicals”と呼ばれる音楽劇であったが、「真面目な」演劇を守ろうとする努力は常におこなわれ続けた。幸いなことに、戦後、Tennessee Williams (1914~) と Arthur Miller (1915~) という2人の秀れた劇作家が出現してO'Neill 以来のアメリカの演劇の「真面目な」伝統がうけつがれることになった。

Miller の *Death of a Salesman* (1949) は戦後の戯曲の中でも傑出したものの1つであり、定評を得ている。何がそれほどにこの作品を世界の戯曲界の問題としたかと言えば、それは社会と個人との永遠の課題に対して作者の熱情が燃えたぎり、戯曲界において今日では稀にしか発見されない「悲劇」の高さまで高揚し得たからにほかならない。彼の作劇上、師と仰ぐものは、イブセン劇であり、ギリシャ劇である。今日に生活する者としての意欲と正義観をいかに戯曲作品の中に盛りこむかを、Henrik Ibsen (1828~1906) に学んでいる。そして人間の本体と劇的な本質をギリシャ劇に学ぼうとする。

Miller の *All My Son* (1947) は、成功した実業家 Joe Keller が犯した不正が、社会的にどのような意味をもつか、社会の中の個人の倫理を

追究した作品である。Keller は、戦時中、戦闘機の部品を作る会社を営み、不良品であることを承知で、製品を納入した。そのために21機が墜落し、若いパイロットたちの生命を奪った。しかし彼はその責任をパートナーの Steve になすりつけ、自分は罪をたくみにのがれた。事件後3年半を経て、Steve の息子と自分の次男の追究によって、自分が犯した罪の社会的な意味を自覚していく。しかも戦争で行方不明となっていたと信じていた長男が、実は父の不正を知って、自ら問題の欠陥機に乗って死を選んだことを知り、Joe は全ての真相を告白して自殺をするのである。

Miller はこの劇で、個人とその家族の幸福だけを望む小市民 Joe を描いて、人間が社会に住む個人としての倫理をもたないかぎり、個人の幸福も倫理も存在しえないことを書いている。このような社会への強い意識は Miller の特色であり、後に発表される *The Crucible* (1953)、*An Enemy of the People* (1951) (イブセンの劇を書き直したもの) などには明確にそれがあらわれている。

Death of a Salesman は、社会派として出発した Miller らしく、資本主義社会においてその犠牲となった一人の老セールスマンの悲劇を書いたと考えることができる。しかし同時にそれは一人の夢想家 (Dreamer) としての Willy Loman が現実との悪戦苦闘に破れた悲劇としても考えることができる。このような二重の意味がこの劇を単なる社会的なドラマに終わらせず、現代の悲劇の位置を得させようとしているのである。

Willy は年老いて、すでに販売の成績は上がらず、売上げの歩合金を、隣人の Charley から毎週借りて、妻の手前をごまかさねばならない。しかし彼は現実をしっかりと見つめることはできない。現実はいかに彼を裏切ったとも言える。フットボールの花形であった息子 Biff は高校の卒業試験に落ち、始末をたのみに旅先の父親のもとに駆けつけた時、ホテルの父の部屋に下着一枚の女がいたのを見てしまった。そして Biff は盗癖のため一生を棒にふる。かつては New England をとびあっていた Willy 自身も、もうだれも相手にしてくれない。話術と人間的な

魅力で物を売る時代ではない。彼はもう用のない存在になってしまったのである。隣人 Charley が忠告するように Willy は自分の現実をまともにもみつめて新しい生活をすべきなのであるが、彼は人生における失敗者としてはどうしても自分を見ることができない。このような現実遊離は息子たちへの期待にもあらわれている。盗癖のため人生に落伍した Biff にも彼は過大な期待をかけ、Biff と争わねばならないし、利己主義で軽薄な Happy に期待をして、裏切られることになる。だが Willy も現実と対決せざるを得なくなる。生活のために、社長と会って内勤の仕事を要求したとき、彼は会社にはもう不要であるという現実をつきつけられる。そればかりか Biff との口論で、Biff の人生落伍の根本に自分の犯した不貞の罪があるということを認めねばならない。Willy は Biff との激しい対話で Biff の愛情を感じとるが、同時に、現実は無用になった自分にできることは保険金を目あてに死ぬことしかないと悟る。そして彼は自動車を駆って自殺するのである。

Willy の生涯はまさに現代社会における悲劇である。彼は決して英雄ではないが、その夢のために、常に現実に挑戦してきて、そしてもろくも敗れ去っていくのであるが、その死には深い感動があるのである。

Arthur Miller と Tennessee Williams は、ほぼ同じ世代の作家として、またほぼ時を同じうして発表したので、よく比較・対照されてきたが質的にはかなり違っている。

Death of a Salesman の主人公 Willy Loman と *A Streetcar Named Desire* (1947) の女主人公 Blanche Dubois とを比較することによって、Miller の描く人間像と Williams の描くそれとを比較することができよう。両者とも一口で言えば、現代社会に適応してゆけない人間なのである。この 2 人が 2 人とも現代社会には受け入れられない人間でありながら必死になって生きてゆこうとする姿が読者の胸をうつ。Blanche にしても Willy にしても読者にとっては、同情する人物以外何者でもない。いずれも現代社会を舞台背景にもちながら、主人公を悲劇に描いている。そのうらには現代社会の皮肉が感じとれる。しかし Miller と Wil-

Williams が描いている人間のあるべき姿は非常に異なっている。Williams の方は社会の波におし流されず、型にはまることのない人間——人間の sex や酒などを欲する本来の姿を理想としているのではないだろうか。一方、Miller は *Death of a Salesman* から読みとれるように、だんだん資本主義化されてきたアメリカにおいて人間間のつながりは金銭的利害関係となる。Willy のように人を愛し愛されることを、また頭より腕力を重視する人間こそ、人間らしい人間としているのではないだろうか。Willy は絶えず夢をもっている。自分に対して、息子たちに対して、いつも夢だけはもっている。Miller はこのような人間こそ人間のあるべき姿と同時に現代人に欠けている点としている。

また、作品全体から受けるイメージを比較してみると、Williams の作品は grotesque な感じがする。それはゆがんだ sex 描写からくるのかもしれない。愛情より性欲が先だった sex である。*A Streetcar Named Desire* の Blanche においては特にそれを感じさせる。性欲のみの sex というものは読者に不快感をもたらす。このゆがんだ sex こそ Williams の描く現代社会を秩序づけている世俗的暴力に妥協できずに孤立した異端者の逃げ道なのである。これに対して Miller の作品においては sex 描写がほとんどみられない。Williams のような野性的人間臭はない。彼の作品が Williams の作品よりかたさを感じるのは、彼が人間自体よりも社会を重視しているからだろう。Williams は下町を舞台とし、セリフも下品で乱暴な言葉使いにしたり、登場人物の服装にしてもみだらな恰好で登場させている。このような雰囲気や前提としているので、なおいっそう Miller のようなかたさはない。Miller の場合、あくまでも個人と社会を結びつけ、社会をたえず意識して生きている人間を描いている。

Miller の人生観は、彼の書いたラジオ放送劇 “The Pussycat and the Expert Plumber Who Was a Man” (1941) にでてくる猫 Tom の言葉を借りて表われている。「……人間が死のつぎにもっとも恐れるただ1つのことは、評判を落すことです。みなさん、人間は自分は悪者だと思っ

ています。そして自分を尊敬できるようになるただ1つの方法は、ほかの人たちにすてきな人だと言ってもらうことです。」この言葉は正に現代人そのものをさしているようである。Miller の全作品の基盤は、演劇が扱うべき最も正当な、最も実の多い主題は、人間が社会と一体になろうとけんめいに努力する姿を示そうとする試みである。Miller には Williams と違って確固たる社会的基盤がある。

文体の点からみると Williams は Miller と違って大変凝っている。いかにもよごれた現代口語の文章のように見せながら、音のひびきや語句のイメージのつらなり、大げさな言いまわし、たたみかけの技法などは、ときには散文詩を思わせ、それが作品の抒情性を高めるのに大いに役立っている。

Miller も Williams も同じように現代社会の矛盾・不合理の重圧の下にあえぐ個人の生き方、その frustration を追究しているが、この2人の相違点を要約して述べるならば、一方の Miller があくまでも社会的道義的な視点から realism 演劇の地盤でこれを描こうとしているのに反して、Williams の方はどちらかと言えば、閉鎖的詩人的な筆で個人の内面のゆがみを象徴的抒情的に歌いあげるところである。つまり Miller は社会というめがねで個人をみているが、Williams はその反対で個人というめがねから社会をみていると言っても言いすぎではないだろう。